コラム
日本のIT事情

Vol.40（最終回）

21 世紀のカルタゴ物語

加藤幹之
富士通（株）／米国弁護士
mkatoh@jp.fujitsu.com

アフリカ大陸北端の中央部，地中海に面した古代の都市国家がカルタゴである．現在は，チュニジア共和国の首都チュニスの郊外に位置し，多くの遺跡を残している．チュニジアは，アラブ，アフリカ，ヨーロッパ諸国の交差点にあることから，古代から商業で栄え，国際的な土地柄である．

カルタゴは，レバノン方面から移り住んだフェニキア人の町だった．しかし，何と言ってもカルタゴの名を歴史に残したのは，一時はローマ軍を打ち負かしたHannibal 将軍の活躍だろう．

カルタゴの栄華は地中海世界との交易からもたらされたが，悲劇もやはり地中海世界の中で起こった．カルタゴの丘に立つとシチリア島とその先のイタリアが見える．

ポエニ戦役とカルタゴの滅亡

ローマは紀元前 270 年にイタリア半島の統一を終えた．長靴型をしたイタリア半島のつま先からほんの 10 キロメートル足らず先にあるシチリア島は，当時，東部はギリシャ人が，西部はフェニキア人であるカルタゴが支配していた．

紀元前 265 年に，ギリシャ人国家の中の強国シラクサの脅威にさらされたメッシーナがローマに支援を求め，ローマがシチリアに軍を派遣したことからローマとカルタゴの対立が始まる．いわゆる「第一次ポエニ戦役」である，

この戦争は 23 年も続き，ローマ軍の勝利に終わる．ローマは，初めて海軍と海外属州を創設し，地中海世界支配への足がかりを作った．一方，カルタゴはシチリアを放棄した後，スペインに新天地を求めた．

「第一次ポエニ戦役」の講和条約のカルタゴ側の交渉代表者は，Hamilcar Barca 陸軍将軍であったが，Hamilcar は当時 9 歳の息子 Hannibal を伴ってスペインを制圧する．その Hannibal が成長して 28 歳になった時，スペイン総監として，ローマの同盟都市サグントを陥落する．これが「第二次ポエニ戦役」の引き金となった．

Hannibal は，紀元前 218 年，5 万の兵と 37 頭の象と言われる大部隊を率いてアルプス山脈を越え，北からローマに進軍した．Hannibal 軍は，トランジメーノ湖畔の戦いやカンネの会戦で勝利する．しかしローマ軍は，持久戦，包囲戦に持ち込み，Hannibal 軍をローマ市内には寄せつけない．

ローマ軍は若き Scipio を送り，Hannibal の本拠地スペインを攻撃する．Scipio はスペインを攻略後，アフリカ戦線でも活躍，カルタゴ本国を脅かすことになる．Hannibal はやむなくイタリア戦線を放棄し，本国に戻るが，ザマの会戦で Scipio に敗れ，紀元前 202 年に第二次ポエニ戦役は終結するのである．

その後も，ローマはカルタゴの復活を懸念し続けていた．第二次ポエニ戦役で，大きな賠償金を支払い，軍備も縮小したが，戦役から 50 年も経つとカルタゴは国力を回復しつつあった．カルタゴは，武力行使に関してローマの同意を得ることが講和条件であったが，隣国ヌミディア（現在のアルジェリア）がたびたび国境問題を起こすことから，ローマの承諾なしにヌミディアに進攻した．

ローマは，講和条約違反を理由にカルタゴにすべての武器の放棄と，首都カルタゴを内陸部に移すことを命じた．カルタゴはこの条件をのむことができず，紀元前 149 年，「第三次ポエニ戦役」が開始された．カルタゴ市民は圧倒的なローマ軍に対し，3 年もの間抵抗を続けたが，紀元前 146 年，ついにカルタゴは陥落する．

ローマ軍は，カルタゴを徹底的に破壊し，カルタゴを呪って町には塩を撒き，カルタゴの名前も葬り去ったのである．

チュニスと世界情報通信サミット

2000 年以上の時が過ぎて，2005 年 11 月 16 日から 3 日間，チュニスで国連が主催する第 2 回 World Summit on the Information Society（WSIS）が開催された．170 カ国以上から約 23,000 人が参加．50 カ国の首脳が集まり，日本からも竹中総務大臣が参加した．

ジュネーブで 2003 年に開催された第 1 回 WSIS で，情報社会に関する共通のビジョンの確立と，そのビジョ

ン実現のための基本宣言や行動計画が採択されたのを受け，第2回のWSISでは，具体的な実施方策や体制等が議論された[☆1]．

第2回WSISで最も議論されたのは，インターネットガバナンスの問題であった．本誌，2005年10月号でも触れたが，「インターネットは自由過ぎた」「誰が国際的に管理すべきか」というような問題が，国連を舞台にして議論されている[☆2]．

さらに，「今のインターネットは，米国主導が目立ちすぎる」「インターネットのドメイン名やIPアドレスを管理するICANN（Internet Corporation for Assigned Names and Numbers）ではなく，国連のような政府間の組織がインターネットを管理すべきだ」という議論も出された．

こうした大きな国連の会議では，本会議前に，関係する専門家や政府の代表が集まり，会議の方向性を決め，決議案等を事前に準備するのが通常である．しかし，今回のWSISの最終文書は，9月に行われた準備会合でも，インターネットガバナンスの問題だけが最後まで事前にまとまらないという異常事態となった．

結局，本会議の前日の夜になって，やっと意見調整ができ，決議案が決まるという綱渡りの会議となった．

そこでは，（1）インターネットガバナンスは，（ICANNが担当するドメイン名やIPアドレスの管理に限られず，迷惑メールやセキュリティ等，インターネットが抱える多くの問題を含めた）広い定義で考えるべきであること，（2）ICANNに代わるインターネット管理のための新しい国際組織創設案は採用されず，これまでの（ICANNを含む）管理体制が継続することとなった．しかし，（3）インターネットガバナンス問題を広く議論する新しい国際的フォーラム（IGF：Internet Governance Forum）の設置が新たに決定された．

IGFの議論に参加しよう

IGFは，国連の事務総長に設置を要請するかたちをとり，5年以内に見直しされる予定である．すでにギリシア政府の申し出があり，10月頃までにアテネで第1回会議が開催されるものと思われる．

IGFは，インターネットガバナンスの鍵となる要素に関連した公共政策問題を議論する場であるが，既存の取り決めや，仕組み，機関や組織に置き換わるものではなく，また監督権限も持たない．それらの既存の組織等の活動を尊重し，それを活用することとし，それらと重複することもない．運営においては，地理的バランスを考え，また，政府，ビジネス部門，市民社会，政府間機関等のすべてのステークホルダーの参加を促す，というようなことが決められている．世界中から，いろいろなバックグラウンドの人が集まって，インターネットの問題を議論できる場を提供するというのが，第1の目的である．

IGFという場が設けられた以上，インターネットにかかわるすべての人々が議論に参加していくことが求められる．

IGFの議論の進め方は，今後準備会合等でさらに検討されるが，これまでの国連の会議同様，事前に（電子メール等の手段を含め）いろいろなかたちで意見を聞く機会もあると思う[☆3]．

インターネットは，自律，分散，協調が基本だ．（1）民間主体のインターネットの基本の維持，（2）安心，安全のためのルール作りは必要だが，過度の規制は避けること，（3）国家間の政治的議論の材料とすることなく，技術や実務に基づいた現実的解決を図ること，等，IGFに対して，我々が主張すべきことは多い．

Hannibalを生んだカルタゴの町でWSISの議論が行われ，本会議直前でかろうじて決議案がまとまったことは象徴的な気がする．

WSIS会議が決裂すれば，各国は独自の閉じたシステム開発に向かい，インターネットが事実上分断する危機もあったかもしれない．

2000年以上前から人類は対立し，血を流し，文化や繁栄の破壊を繰り返してきた．インターネットの国際管理の議論も，そうした対立の歴史の1つにならないことを願う．

インターネットのバックボーンやサービスを提供する企業の本社が多くあるバージニア州を見て，私は「すべての（インターネットの）道はバージニアに通ずる」と言ったことがある．

カルタゴを破壊した都市国家ローマは，帝政に向かい繁栄するが，その後は歴史の示すとおりである．フェニキア人の都市カルタゴの地であるチュニジアも，現在は住人の98％以上がアラブ系の人々である．

インターネットこそ「人類協調の歴史」を作ることに期待したい．

☆1 議論の結果は，チュニスコミットメント，チュニスアジェンダとしてまとめられた．http://www.itu.int/wsis/documents/index2.html参照．日本語（仮）訳は，http://www.soumu.go.jp/s-news/2005/051119_1.html参照．

☆2「情報処理」46巻10号，pp.1178-1179（2005）．

☆3 2月16，17日にジュネーブで準備会合が開催される予定であるが，本稿の締め切り後であるため，IGFのより具体的な内容は不明である．

（平成18年2月2日受付）